

家庭におけるしつけと教育

研究開発部
下開 千春

幼い子どもによるはじめてのおつかいを題材としたテレビ番組の視聴率は高いという。幼い子どもが店員や近所の人に挨拶したり、お手伝いをする姿は頼もしく、かわいらしい。子どもが大きくなるにつれ、挨拶などの基本的な生活習慣は、当然身につけるべきものとして求められるようになっていく。

<しつけと教育が足りない>

内閣府は2000年にしつけと教育について小学4年生から中学生までの子をもつ親に対し意識調査を実施した。その結果の中で興味深いのは、わが国の子育てや教育の問題点について、「家庭でのしつけや教育が不十分であること」という意見が1996年の51.6%から2000年には70.8%に増加したことである。子をもつ親の大半が、日本の家庭での子に対するしつけと教育が不十分であると感じている。

「教師の教育する力が不十分であること」という意識も25.0%から36.3%に増加している。そして、「学校で教えることが多過ぎること」、「学校の規則が厳し過ぎること」という意識は低下している。学校におけるしつけや教育が必要であると考え親が増えていることが分かる。

さらに同調査では子を持つ親に対し、自らの子どもへのしつけや教育の悩みについて複数回答でたずねている。回答が多かったのは、「子ども

の進学や受験のことが心配である(31.8%)、「子どもに基本的な生活習慣が身につけていない(28.5%)」で、それぞれ約3割を占めた。「子どもに対するしつけや教育に自信が持てない」と答えた親は11.3%と約10人に1人であった。受験や生活習慣への不安を持つ親がいるなかで、「特に悩みや不安を感じていることはない」と答えた親も30.5%と少なくない。

<弱い親の自立と責任感>

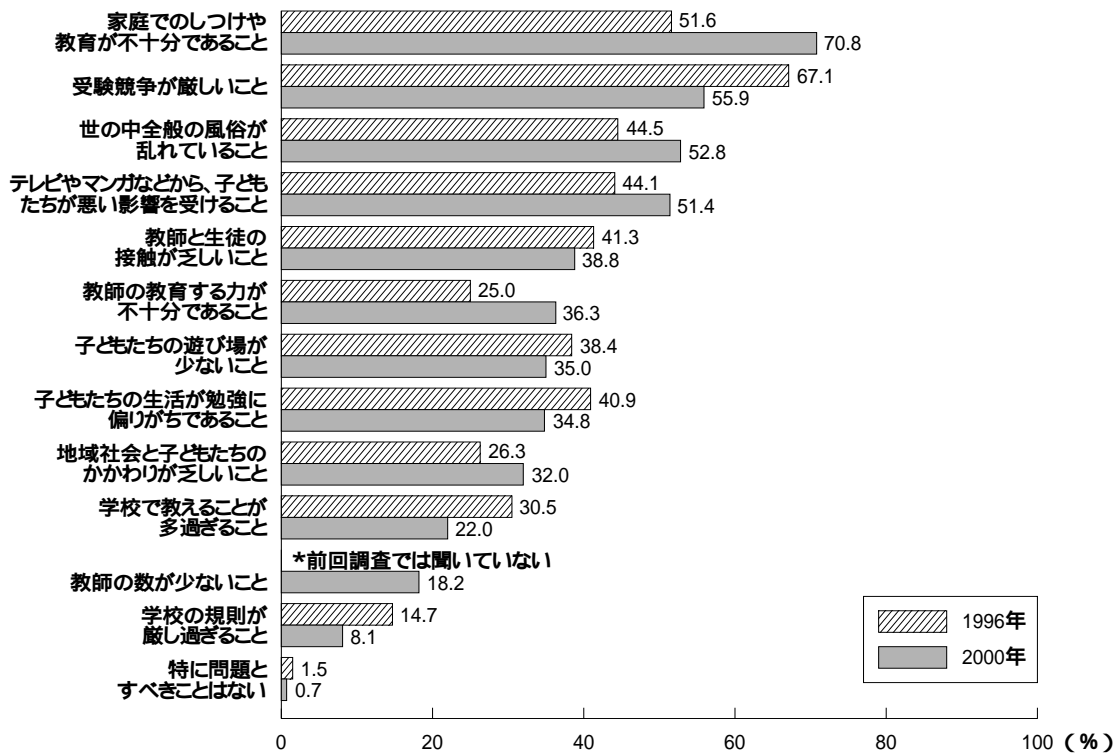
一方、東京都の都政モニターに対する調査結果では、「親が子どもの育成や教育に対する自信と力を失っている」と答えた人は約6割となっている。その原因については、「親自身が自立できていない(33.5%)」、「親の責任感や心構えが弱い(27.8%)」、「親から子へ、しつけや子育ての知恵が伝承されていない(13.4%)」、「育児や教育に関する情報が氾濫しすぎて、親が惑わされている(10.6%)」と、親の自立不足や責任感の低さを原因とする回答が多い(図表2)。

<取り返しのつかない子ども時代>

当研究所の林聡子前研究員は、1998年に16歳から24歳の若者の規範意識について調査し、若者の間でも規範意識には高低がみられ、子どものころからしつけの厳しかった若者には規範意識が高い傾向がみられるとした(図表3)。特に、家族の一員としての責任など日常生活に係る事柄や、親を敬う態度等にしつけの厳しさによる違いがみられると指摘している。

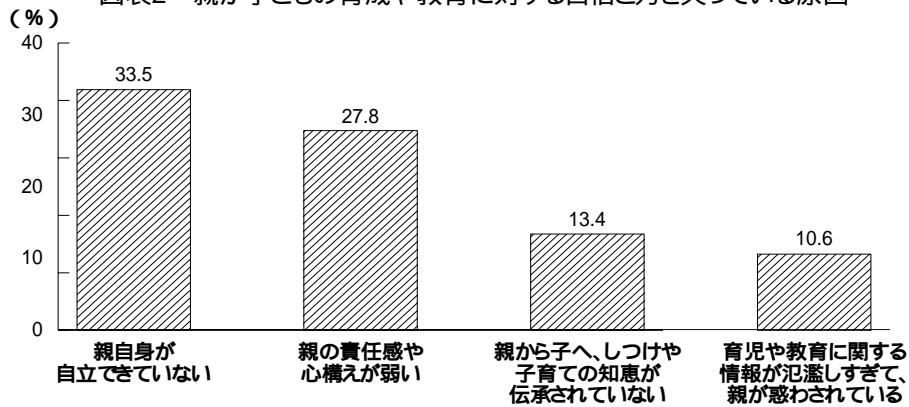
既存の調査から、多くの親は子のしつけや教育は親に責任があると答えている。家庭でのしつけや教育について、親の責任が問われている。

図表1 わが国の子育てや教育の問題点(複数回答)



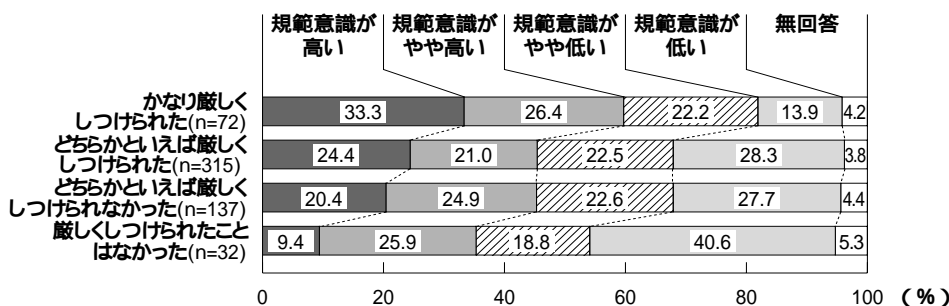
注:調査期間は2000年9月7日~9月24日。調査対象者は小学4年生~中学3年生の父母998人。
資料:内閣府『日本の青少年の生活と意識 第2回調査』(2001年)

図表2 親が子どもの育成や教育に対する自信と力を失っている原因



注:「親が子どもの育成や教育に対する自信と力を失っている」と「思う」と答えた人284人が回答。
調査期間:2000年1月27日~2月10日。調査対象:都政モニター459人。
資料:東京都『第5回都政モニターアンケート『心の東京革命』』(2000年)

図表3 子どもへのしつけの厳しさと規範意識の高さ



注:調査期間は1998年1月。調査対象は当社生活調査モニター男女568人(16~24歳)。
資料:林聡子『若者の規範意識に関する調査』『LDI REPORT』(1999年1月号)